

烏弋山離とアレクサンドリア(4)

—烏と阿の漢代音について—

吉池孝一 中村雅之

なぜ阿を利用しなかったのか

吉池：白鳥庫吉(1917)は、「烏弋山離」は「Alexandria」の音訳ではないとしました。もしも「Alexandria」音訳であるならば「阿歴山離」などとして、/lek/の音訳には「歴」を使うはずだという議論です¹。たしかに、歴(カ氏上古音**liek*、中古音 *liek*)があるならば、わざわざ(カ氏上古音**djak*、藤堂氏上古音 *djak*)を使う必要はないという指摘は的を射たものです。われわれは、「烏弋山離とアレクサンドリア(3)」において、漢代当時の長安では来母の歴は [k̚iek] のように摩擦の聞こえが強く /lek/ の /l/ にふさわしくなかったため、近似音として喻母四等の弋(カ氏**djak* [djak] もしくは藤堂氏 [djak]) を利用したとしてこの問題にわれわれなりの解答をだしました。

同様の問題は「Alexandreia²」の「A」/a/にもあります。「A」/a/の音訳になぜ「阿」(カ氏上古音**â* [ʔa]、中古音 *â* [ʔa]) を利用しなかったのかということについて説明しなければなりません。

中村：第2回の対談で「Alexandreia」の「A」/a/に対応する烏の音は、つぎの図のように、前漢の長安音で [a]、後漢の洛陽音で [ɔ] であったと想定しました。

	前漢	後漢
保守的	長安(首都) 一帯 [a]	長安一帯 [a]
革新的	洛陽一帯 ([ɔ])	洛陽(首都) 一帯 [ɔ]

後漢の洛陽を中心とした仏典の音訳において、烏など模韻の字はサンスクリットの *o* 類の音に対応しており、後漢の洛陽では [ɔ] であったと考えられます。一方、前漢の長安音で

¹ 白鳥庫吉(1917)「罽賓國考」。『白鳥庫吉全集 第六卷』(岩波書店, 1970年)所収による。「當時漢人が實際彼の國に至りて Alexandria の名を聞き傳へたらんには、必ず之を阿歴山離とも記すべき筈なり。何となれば1音は元來漢人の有する發音なればなり。然るに何が故に之を烏弋山離と書き綴りしか、甚だ奇怪の事と謂はざるべからず。」

² 我々は烏弋山離をラテン語形 Alexandria ではなく、ギリシア語形 Alexandreia の音訳と考えている。

は烏は [a] であり、Alexandria の音訳「烏弋山離」は長安音に基づいたものと見なした訳です。

カ氏によれば、阿は上古音・中古音ともに [ʔa] となるわけですが、もしもそうであるならば Alexandria の音訳になぜ阿が用いられなかったのか、阿は漢代にどのように発音されたのかということが問題になります。

阿と烏の上古・中古音諸説

吉池：漢代音を検討する前に、阿と烏について、諸家の上古音と中古音を確認すると次のとおりです³。

		上古音	中古音
カールグレン	阿	*·â [ʔa]	·â [ʔa]
	烏	*·o	·uo
董同龢	阿	â [a]	â [a]
	烏	âg [ag]	uo
王力	阿	a	a
	烏	a	u
藤堂明保	阿	·ar	·a
	烏	·ag	·o
Schuessler	阿	ʔâi [ʔai]	ʔâ [ʔa]
	烏	ʔâ [ʔa]	ʔuo

中村：カールグレンと王力の上古音は、阿と烏の違いを主母音の違いとしています。それに対して、董同龢、藤堂明保と Schuessler は主母音を変えずに、韻尾-r,-g,-i によって区別します。このような上古音の区別が、中古音の区別となって表れるのですが、上古音と中古

³ 音声記号 [] は本稿対談者が付した。それぞれの再構音は以下による。

Karlgren, B. (1957), *Grammata Serica Recensa*. Stockholm: The Museum of Far Eastern Antiquities. 1987 年のリプリント版による。

董同龢 (1944) 『上古音韻表稿』 台聯國風出版社。第三版 1975 年による。

王力 (1980) 『詩経韻讀』 上海古籍出版社。『王力文集 第六卷』 (山東教育出版社, 1986 年) 所収による。

藤堂明保 (1978) 『学研漢和大字典』 学習研究社。

Schuessler, Axel (2009), *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese*. Honolulu: University of Hawaii Press.

なお、藤堂氏は阿·ag とするが·ar の誤記であろう。以後·ar の誤記として議論する。

音の過渡期ともいえる漢代音がどのようなものであったかが当面の問題です。

対音資料による漢代音

吉池：漢代音を反映した対音資料として、まず漢書や後漢書の地名や人名をあげることができます。しかし、地名や人名については複数の解釈があるのがふつうで、決定打とはしにくいのが現実です。そのなかで、漢書と後漢書にあらわれる「烏弋山離」（「Alexandria」に対応）は信頼できると考え、この音訳語を中心として漢代音の一部について推定を試みたわけです。もっとも、阿などの歌部の字の使用は、われわれが見た範囲では見つかることができません。

中村：漢書などに阿など歌部の字の使用例が無いと言い切るのは難しいことですが、見つけることができなかったということも事実でしょうから、そのことから想像すると、歌部の字音は a 類の音訳に相応しくなかったのかもしれないですね。

吉池：歴史書以外の対音資料として仏典の音訳語があります。信頼できるものとしては、後漢の洛陽を拠点として行われた訳経があり、Coblin(1983)⁴にまとめられており便利です。

中村：Coblin(1983)が集めた仏典音訳の実例によると、上古音の魚部に含まれる魚・虞・模韻はおおむねサンスクリットの o 類の音に対応しています。それでわれわれは、後漢の洛陽音として模韻の烏を [ɔ] としたわけです。ところで、歌部の阿はどのような使われ方をしていますか。

吉池：Coblin(1983)によると阿はサンスクリットの a 類の音に対応し、Coblin(1983)は後漢音として ?a と表記します。

歌部歌韻の阿の用例：阿含 Skt.āgama 阿難 Skt.ānanda 阿那含 Skt.anāgāmin

歌部歌韻のその他用例：祇陀 Skt.jatavana 沙呵 Skt.sahā 摩訶惟日羅 Skt.mahāvaiṣṭya

中村：なるほど。たしかに阿はサンスクリットの a 類の音に対応していますね。しかも、-r,-g,-i などの韻尾も想定することは困難です。一応の措置として、阿 [a] としておいて良いのではないのでしょうか。

阿の漢代長安音

吉池：そうしますと、われわれは対音資料により、魚部の烏の漢代音として、長安音で [a]、洛陽音で [ɔ] を想定し、歌部の阿の洛陽音として [a] を想定したことになります。漢代音としてこの三種を固定し、その上で、諸氏の上古音と中古音から阿の長安音を想定し()で括

⁴ Coblin, W. S. (1983), *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, The Chinese University Press.

ってみましょう。

カールグレンと董同龢によると次のようなことでしょうか。なお、影母字の声母を [ʔ] とするかゼロ声母とするかは様々ですので、ここでの漢代音は簡略に従いゼロ声母としておきます。

		上古音	漢代音		中古音
			長安音	洛陽音	
カールグレン	阿	*·â [ʔa]	(a)	a	·â [ʔa]
	烏	*·o	a	ɔ	·uo
董同龢	阿	â [a]	(a)	a	â [a]
	烏	âg [ag]	a	ɔ	uo

中村：カールグレンや董同龢のように歌部の阿の上古音に [ʔa] や [a] を想定すると、漢代長安音で魚部の烏と同音になってしまいます。これは不都合ですね。

吉池：王力によると次のようなことでしょうか。

		上古音	漢代音		中古音
			長安音	洛陽音	
王力	阿	a	(a)	a	a
	烏	a	a	ɔ	u

中村：漢書や後漢書で、「Alexandria」の「A」/a/などの a 類の音に魚部模韻の烏 [a] を対応させるのですが、このように対音資料の a 類の音については、阿ではなく烏の方を対応させるのが通常のありかたです。それは阿と烏の音質の違いによるものであったと考えると、王力の上古音から想定した漢代長安音の対立でも矛盾はありません。王力の上古音に沿って阿の漢代長安音を想定した場合、阿の方は [a] ですが、それは相当に前よりの音、つまり聴覚印象としては [æ] に近いような音だったために、a 類の音訳にはふさわしくなかったと考えることとなります。

吉池：藤堂明保と Schuessler によると次のようなことでしょうか。

		上古音	漢代音		中古音
			長安音	洛陽音	
藤堂明保	阿	·ar	(ar)	a	·a
	烏	·ag	a	ɔ	·o
Schuessler	阿	ʔâi [ʔai]	(ai)	a	ʔâ [ʔa]

烏 ʔâ [ʔa] a ɔ ʔuo

中村：阿の漢代長安音が韻尾-r を伴った ar、もしくは韻尾-i を伴った ai であったならば「Alexandreia」の「A」/a/などの a 類の音訳において、有韻尾の阿 ar, ai は使わず、無韻尾の烏 [a] を使ったと説明することができて、この二者の上古音によっても問題はありませ

ん。
吉池：「Alexandreia」の「A」/a/の音訳になぜ「阿」（カ氏上古音 *â [ʔa]、中古音・â [ʔa]）を利用しなかったのかということ議論してきたわけですが、漢代長安音の烏が [a] であり、阿は [a] (≒ [æ]) [ar] [ai] のいずれかであったならば説明はつくということですね。そうすると、漢代の長安と洛陽の状況は次のようなことでしょうか。

	前漢	後漢
長安一帯（保守的）	烏： [a] 阿： [a] or [ar] or [ai]	烏： [a] 阿： [a] or [ar] or [ai]
洛陽一帯（革新的）	烏： [ɔ] 阿： [a]	烏： [ɔ] 阿： [a]

中村：阿が、韻尾のない [a] であったとしても、ar や ai など韻尾-r,i があつたとして、それらを実証する対音資料が見つからないということが難点ですね。しかし、なんらかの説得力のある資料をみつけるまでの一応の処置としてなら、これでいいのではないでしょうか。

ところで、上の漢代音の表はわれわれの想定ですが、Schuessler(2009)も漢代音を提示していますね。

Schuessler(2009)その1—後漢音の説明

吉池：Schuessler(2009)には、上古音の韻部ごとに漢字が並んでおり、その漢字のもとに、OCM(ミニマル上古音)⁵、LHan(後漢音)、MC(中古音)、Mand.(現代音)がなっています。下記は、() で平声の中古音の韻の所属を示し、Schuessler(2009)の OCM、LHan、MC を提示したものです。

	OCM(ミニマル上古音)	LHan(後漢音)	MC(中古音)
烏(模韻)	ʔâ	ʔa	ʔuo
阿(歌韻)	ʔâi	ʔai > ʔa	ʔâ

⁵ Schuessler は自ら提示した再構音を Minimal Old Chinese と称している。Baxter など他の研究者が好んで用いる煩瑣な付属記号を排した必要最小限の簡略表記ということであろう。

中村：後漢音で烏と阿が同音の?ɑ となると両音は合流してしまい、中古音で烏?uo と阿?â に分かれることができません。これはまずいですね。もっとも、「?ai > ?ɑ」とあるので、後漢音としては微妙な扱いにみえます。何か説明はありませんか。

吉池：当該書において各字は上古音の韻部ごとにまとまっているといましたが、それぞれの韻部の最初に、その韻部についての説明文があります。阿が所属する歌部の説明は 210 頁にあります。その一部を示すと次のようです。

OC *-âi (gē 歌 MC Div. I) and *-râi (jiā 加 Div. II) have become LHan -ɑ and -ɑ and fallen together with Rime 1 Div. II -ɑ < *-râ (jiā 家), and with Div. III -ia < *-ɑ (shè 舍), while MC OC *-ɑ > MC -jwo (yú 魚) and *-â > MC -uo (tǔ 土) have already become LH -ɔ.

However, in the eastern (Shandong) dialect of Zhèng Xuán OC -âi has survived as *-ai; today's Min dialects and 'Old South' still have this final. LHan writes this archaic -ai for mainstream -ɑ.

中村：二行目に印刷ミスがあるようです。'while MC OC *-ɑ >' の。'MC' は不要で、'while OC *-ɑ >' とすべきです。この 'MC' ですが、あるいは、'and fallen together with Rime 1 MC Div. II -ɑ < *-râ (jiā 家), and with MC Div. III -ia < *-ɑ (shè 舍),' とあったならば、文意をとりやすいかもしれません。そうすると、大意は次のようになります。

歌部の上古音*-âi (一等) と*-râi (二等) は後漢音では-ɑ と-ɑ になって、魚部の*-râ > -ɑ (二等) や*-ɑ > -ia (三等) と合流した。一方、魚部の*-ɑ と*-â は後漢音ではすでに-ɔ になっていた。

しかし、鄭玄の東部 (山東) 方言では歌部は*-ai のままであり、現代閩方言や'Old South' ではこの韻母を保っている。私の後漢音ではこの古風な-ai を主流だった-ɑ の代わりに記している。

Schuessler(2009)その 2—古風な発音

吉池：なるほど、この文に書いてあることを整理すると次のようになるということでしょうか。

	OC 上古音	LHan 後漢音	MC 中古音
	歌部		
歌 (歌韻)	*-âi	-ɑ	-â
加 (麻韻)	*-râi	-ɑ	-ɑ
	魚部		
家 (麻韻)	*-râ	-ɑ	-ɑ
舍 (麻韻)	*-ɑ	-ia	-ia
魚 (魚韻)	*-ɑ	-ɔ	-jwo

土（模韻） *-â -ɔ -uo

中村：文字通りにみると舎と魚が上古音で同じ韻母になりその後の変化が説明できません。これは主母音に焦点を当てた説明と理解すべきですね。それにしても、中古音で魚韻となる魚や、模韻（上声で姥韻）となる土が後漢音で-ɔ であるとする、先に模韻の烏を-a とした Schuessler(2009)本文の記述と合いません。魚や土の後漢音は本文でどのようになっていますか。

吉池：魚の後漢音は **ɲia** で、土の後漢音は **tha** ですから、説明で-ɔ とすることとは合いません。魚韻、虞韻、模韻が後漢音で-ɔ 系統の音で、歌韻と麻韻が-a 系統の音であるならば、同音とならないため、この方がいいとも言えるのですが、どうして説明と本文が一致しないのでしょうか。

中村：歌部についてはあえて古風な韻母を記すと断りを入れているのを見ると、魚部についても後漢では大勢は-ɔ であったが、古風な-a を採用したということなのかも知れません。それにしてもいささか杜撰な印象はぬぐえませんか。

吉池：魚部の大勢（mainstream）である -ɔ を採用せず古風な- a を採用し、歌部の大勢（mainstream）である- a を採用せず古風な-ai を採用するというのはどういうことなのか、今少し時間をかけてその意図を検討し納得をしたいものです。いずれにしても、説明文にあったように魚韻、虞韻、模韻が後漢音で-ɔ、歌韻と麻韻が-a 系統の音とするならば、われわれの想定した洛陽音とほぼ同じということになります。一方、本文の記述はわれわれの長安音に近いものです。

中村：つまり、Schuessler が古風⇔主流と考えたものを我々は長安音⇔洛陽音という地域差で解釈したということになります。なお、上で二等韻に-r-介音を設けるのは新派に共通した方法ですが、今は掘り下げないでおきます。

Schuessler(2009)その3—鄭玄の音注にみる歌部の漢代音

吉池：Schuessler(2009)の説明文の二つ目の段落の内容はなかなか興味深いですね。中村さんの訳をもう一度みてみましょう。

しかし、鄭玄の東部（山東）方言では歌部は*-ai のままであり、現代閩方言や‘Old South’ではこの韻母を保っている。私の後漢音ではこの古風な-ai を主流だった-a の代わりに記している。

中村：「鄭玄の東部（山東）方言では歌部は*-ai のままであり」という部分ですが、

Schuessler(2009)には何か書いてありますか。

吉池：具体的なことはありません。いずれかの論文で言及しているのでしょうか、それは今後確認することとして、鄭玄の音注ならば、それをまとめたものを Coblin(1983:198-219)でみることができます。とりあえず直接それによってみましょう。「x 讀 y」「x 讀如 y」「x 讀曰 y」などの音注を集めたもので 476 例あります。「x は y のように読む」ということですから、x の音と y の音は類似しているとみてよいのでしょうか。

中村：歌部と歌部以外の字が、類似音として並んでいるならば参考にはなるでしょうね。

吉池：476 例のなかから一方が歌部、他の一方が歌部以外の例を抜き出すと次のとおりです。() で所属する上古音の部と中古音の韻を示す。

61. 于(魚部、虞韻)讀曰爲(歌部)
86. 離(歌部)讀如儷(支部、霽韻)
87. 羸(歌部)讀曰羸(微部、脂韻)
91. 撝(歌部)讀爲宣(元部、仙韻)
111. 遺(微部、脂韻)讀曰隨(歌部)
328. 依(微部、微韻)讀如…倚(歌部)
390. 偏(真部、仙韻)讀如…跛(歌部)

中村：86 の儷ですが、その日本漢字音は、呉音でライ、漢音でレイとなります。カールグレン氏の中古音 (*liei*) でも韻尾-i が再構成されます。もしも、後漢において中古音のように韻尾-i を想定してよいならば、歌部の離も類似した音として、韻尾-i を持っていたということになります。

吉池：しかし、鄭玄の字音において、儷の韻尾-i は無かったか或いは他のものであったため、同様な状況であった歌部の離の類似音として注記した、とも考えられますね。

中村：そうなのです。このような音注はどのようにも解釈が可能で音価の決定打とすることはできません。「歌部は*-ai のまま」ということが一目瞭然、というわけにはいかないわけです。韻尾-i を持っていたと解釈しうる余地はあるという程度のものです。

吉池：韻尾-i を持っていたと解釈しうる余地はあるという点からみると、87 の羸(微部、脂韻)の日本漢字音は呉音漢音ともにルイで、中古音(カ氏 *ljwi*)でも韻尾-i が再構成されます。111 の遺(微部、脂韻)も日本漢字音をみると、呉音でユイ、漢音でイとなり、中古音(カ氏 *jwi*)でも韻尾-i が再構成されます。この二例も加えていいのかもしれませんが。

中村：三例ともに、上古歌部で中古に支韻となる字です。そこに想定した韻尾-i を、阿などの上古歌部で中古に歌韻になる字にまで及ぼして良いかどうか慎重でなければなりません。いずれにしても、このような音注だけでは傍証としてしか使えませんね。

ところで、「現代閩方言や‘Old South’ではこの韻母を保っている」とありますが、このことについて Schuessler(2009)には何か説明はありますか。

Schuessler(2009)その4—現代南方方言の [-ai]

吉池：Schuessler(2009)には具体的な説明は見当たりません。このようなことを誰が最初に指摘したかという研究史上の問題については改めて検討することとして、今回は直接に『漢語方音字彙（第二版）』（文字改革出版社，1989年）に拠って状況をみることにします。下線部が当該部分となります。なお、声調の異なりについては取り上げないこととしました。

河（上古歌部、中古歌韻）

北京 [xɤ]、済南 [xɤ]、西安 [xuo]、太原 [xɤ]、武漢 [xo]、成都 [xo]、合肥 [xu]、揚州 [xo]、蘇州 [fiəu]、温州 [vu]、長沙 [xo]、双峰 [yɔ]、南昌 [hɔ]、梅県 [hɔ]、広州 [hɔ]、陽江 [hɔ]、厦門 [ho] 文語音 [o] 白話音、潮州 [ho]、福州 [ɔ] 文語音 [xai] 白話音、建瓯 [ɔ]

簏（上古歌部、中古去声過韻合一・平声戈韻に対応する）

北京 [po]、済南 [pɤ]、西安 [po]、太原 [pɤ]、武漢 [po]、成都 [po]、合肥 [pɔ]、揚州 [po]、蘇州 [pu]、温州 [pu] 文語音 [pai] 白話音、長沙 [po]、双峰 [pɔ]、南昌 [pɔ]、梅県 [pɔ]、広州 [pɔ]、陽江 [pɔ]、厦門 [po] 文語音 [pua] 白話音、潮州 [pua]、福州 [pɔ] 文語音 [puai] 白話音、建瓯 [puɛ]

破（上古歌部、中古去声過韻合一・平声戈韻に対応する）

北京 [p'ɔ]、済南 [p'ɤ]、西安 [p'ɔ]、太原 [p'ɤ]、武漢 [p'ɔ]、成都 [p'ɔ]、合肥 [p'ɔ]、揚州 [p'ɔ]、蘇州 [p'u]、温州 [p'ɔy] 文語音 [p'a] 白話音、長沙 [p'ɔ]、双峰 [p'ɔ] 文語音 [p'u] 白話音、南昌 [p'ɔ]、梅県 [p'ɔ]、広州 [p'ɔ]、陽江 [p'ɔ]、厦門 [p'ɔ] 文語音 [p'ua] 白話音、潮州 [p'ɔ] 文語音 [p'ua] 白話音、福州 [p'ɔ] 文語音 [p'uai] 白話音、建瓯 [p'ɔ] 文語音 [p'uɛ] 白話音

磨（上古歌部、中古平声戈韻合一）

北京 [mo]、済南 [mɤ]、西安 [mo]、太原 [mɤ]、武漢 [mo]、成都 [mo]、合肥 [mɔ]、揚州 [mo]、蘇州 [mo]、温州 [mɔy]、長沙 [mo]、双峰 [mɔ]、南昌 [mɔ]、梅県 [mɔ]、広州 [mɔ]、陽江 [mɔ]、厦門 [mɔ] 文語音 [bua] 白話音、潮州 [mɔ] 文語音 [bua] 白話音、福州 [mɔ] 文語音 [muai] 白話音、建瓯 [mɔ] 文語音 [muɛ]

白話音

舵（上古歌部、中古上声咍韻・平声歌韻に対応する）

北京 [tuo]、済南 [tɤ]、西安 [t'uo]、太原 [tɤ]、武漢 [to]、成都 [to]、合肥

[tɔ]、揚州 [tɔ]、蘇州 [dəu]、温州 [dəu]、長沙 [tɔ]、双峰 [dɔ]、南昌 [t'ɔ]、梅県 [t'ɔ]、広州 [t'ɔ]、陽江 [t'ɔ] 文語音 [t'ai] 白話音、厦門 [tɔ] 文語音 [tua] 白話音、潮州 [tɔ] 文語音 [tua] 白話音、福州 [tɔ] 文語音 [tuai] 白話音、建瓯 [tuɛ]

籬 (上古歌部、中古平声歌韻)

北京 [luo]、濟南 [luɣ]、西安 [luo]、太原 [luɣ] 文語音 [lɣ] 白話音、武漢 [no]、成都 [no]、合肥 [lɔ]、揚州 [lɔ]、蘇州 [ləu]、温州 [ləu]、長沙 [lɔ]、双峰 [lɔ]、南昌 [lɔ]、梅県 [lɔ]、広州 [lɔ]、陽江 [lɔ]、厦門 [lɔ] 文語音 [lua] 白話音、潮州 [lɔ] 文語音 [lua] 白話音、福州 [lɔ] 文語音 [lai] 白話音、建瓯 [lɔ] 文語音 [suɛ] 白話音

螺 (上古歌部、中古平声戈韻合口)

北京 [luo]、濟南 [luɣ]、西安 [luo]、太原 [luɣ]、武漢 [no]、成都 [no]、合肥 [lɔ]、揚州 [lɔ]、蘇州 [ləu]、温州 [ləu] 文語音 [lai] 白話音、長沙 [lɔ]、双峰 [lɔ]、南昌 [lɔ]、梅県 [lɔ]、広州 [lɔ]、陽江 [lɔ]、厦門 [lɔ] 文語音 [le] 白話音、潮州 [lɔ]、福州 [lɔ] 文語音 [lɔy] 白話音、建瓯 [lɔ] 文語音 [so] 白話音

搓 (上古歌部、中古平声歌韻)

北京 [ts'uo]、濟南 [ts'ux]、西安 [ts'uo]、太原 [ts'ux]、武漢 [ts'o]、成都 [ts'o]、合肥 [ts'ɔ]、揚州 [ts'o]、蘇州 [ts'əu]、温州 [ts'əu] 文語音 [səu] 白話音、長沙 [ts'o]、双峰 [ts'o]、南昌 [ts'ɔ]、梅県 [ts'ɔ] 文語音 [ts'ai] 白話音、広州 [tʃ'ɔ] 文語音 [tʃ'ai] 白話音、陽江 [tʃ'ɔ] 文語音 [tʃ'ai] 白話音、厦門 [ts'o] 文語音 [so] 白話音、潮州 [ts'o] 文語音 [so] 白話音、福州 [ts'ɔ]、建瓯 [ts'ɔ]

倚 (上古歌部、中古上声紙韻・平声支韻に対応する)

北京 [i]、濟南 [i]、西安 [i]、太原 [i]、武漢 [i]、成都 [i]、合肥 [ɿ]、揚州 [i]、蘇州 [i]、温州 [i]、長沙 [i]、双峰 [i]、南昌 [i]、梅県 [i]、広州 [ji]、陽江 [ji]、厦門 [i] 文語音 [ua] 白話音、潮州 [i] 文語音 [ua] 白話音、福州 [i] 文語音 [ai] 白話音、建瓯 [i] 文語音 [uɛ] 白話音

白話音に [-ai] があらわれる字は上にとどまりませんが紙面の都合により例の提示はここまでとします。なお、磨の温州 [mɔy] や螺の福州 [lɔy] の [-ɔy] も、[-ai] に関わる音なのでしょう。

中村：これをみると、閩方言の福州の白話音に、中古音で歌韻戈韻になるもの、および支韻になるものの両者を通して [-ai] が出てきます。その他の方言としては、呉方言の温州、粵方言の広州や陽江、客家方言の梅県に [-ai] があります。すべて白話音ですね。「現代閩方言や‘Old South’ではこの韻母を保っている」とする「‘Old South’」は閩方言以外の南方諸方言の口語層の音を指すのかもしれませんが。

吉池：Schuessler(2009:2)に、官話、呉、贛、湘、粵、客家、閩方言を挙げた後に“Except for Min and the oldest colloquial layer in southern dialects (Norman’s ‘Old South’), the phonological

categories of modern dialects correlate with the Middle Chinese (MC) categories of the rime book *Qièyùn*.”とあります。これより、‘Old South’ は南方方言の最古の口語層を指すノーマン氏の用語であることがわかります。

おわりに

中村：いずれにしても、閩方言である福州方言の口語層を中心として、一部の南方方言の口語層にも [-ai] が見られるわけで、これを秦から漢代において、周辺地域に移植された音とみなしてよいならば、歌部の阿は韻尾-i を伴った [ai] であったとしていいかもしれません。

吉池：傍証として韻尾-i の存在をほのめかしている鄭玄の音注を挙げることができます。

中村：そうすると、さきに阿の漢代長安音について、“なんらかの説得力のある資料をみつけるまでの一応の処置”として、[a] or [ar] or [ai] としました。しかし、現代南方方言の口語層にみられる [-ai] と、後漢の字音より想定し得る鄭玄の音注 (Schuessler(2009)は山東方言とする) の韻尾-i を、漢代の長安音が移植されたものとみなして、阿の漢代長安音を [ai] に絞り込んでもいいかもしれません。

吉池：さきの長安方言と洛陽方言の対応を次のように書き直すということですね。

	前漢	後漢
長安一帯 (保守的)	烏： [a] 阿： [ai]	烏： [a] 阿： [ai]
洛陽一帯 (革新的)	烏： [ɔ] 阿： [a]	烏： [ɔ] 阿： [a]

中村：長安方言の阿 [ai] については、対音資料により実証したいところです。それができるかどうかわかりませんが、今後の課題ということにしましょう。

吉池：阿 [ai] は漢代長安音として想定したもので、詩経の時代の上古音がどのようなであったかということと直接に関わるものではありません。しかし、歌部の上古音を*-ai(-aj)とするとともに、来母を*-r-とし、喻母四等を*-l-とし、二等韻に*-r-介音を設けるなどということも新派と呼ばれる人たちの特徴です。その諸特徴が、上古音としてどのように設定されたのか、漢代音とどのような関わりをもつのか確認をしたいところですが、それはまたの機会にして今回はここまでとしましょう。